

子供の事故と事故防止に
関する調査研究
(分担研究：小児の障害につながる傷病に関する研究)

田 中 哲 郎

要約：今回の調査により、子供の事故体験を持つ母親は全体の65.5%で、多い体験としては、医師を受診した外傷(42.7%)、タバコ等の誤飲(19.5%)であった。母親の実施した事故防止対策としては、誤飲対策89.9%、交通事故対策83.0%、転落対策46.2%などで比較的高い水準であった。しかし、事故対策を実施している家族の事故の発生率は実施していない家庭に比べ低くなく、現在実施している予防策は余り効果的でないと思われた。事故の発生率、予防策の実施率に関してはほとんど地域差がみられなかった。

見出し語：子供の事故、事故防止、事故対策

研究方法：

子供の事故の発生頻度とその種類、母親の事故防止策の実施の現状を知り、小児事故に関する問題点、今後とるべき対策について検討するためにアンケートにより実態調査を行った。調査は昭和62年秋に実施し、対象者は東京都八王子市、日野市の797名、埼玉県春日部市の106名、広島県の888名(市街地423名、山村部241名、漁村部224名)である。回答者である母親の属性としては平均年齢32才、子供の数は平均2名、職業を持っている者は36.2%、祖母と同居しているものは36.2%、最終学歴は中学、高校卒が47.6%、短大専門学校卒が36.1%、大学卒が16.2%であった。

結果：(1) 子供の事故体験

子供がタバコや玩具、薬など誤って飲んだことのある母親は349名(19.5%)、お風呂、川、プールでおぼれかかったことがある母親は100名(5.6%)、切り傷、打撲などのけがで医者を受診したことがある母親は765名(42.7%)、交通事故にまきこまれたり、もう少しで事故に会いそうになった経験がある母親は192名(10.7%)、その他の危険な体験をしたことがある母親は132名(7.4%)、以上のような危険な体験をしていない母親は653名(36.5%)であった。地域差については統計学的に大きな差は認められなかったが、誤飲体験では埼玉県がやや低く、広島県でやや高かった。

東京医科大学八王子医療センター小児科

Department of Pediatrics, Tokyo Medical College Hachioji Medical Center

溺れかかった体験では埼玉県、広島県がやや高く外傷で医師を受診した体験では東京都、埼玉県でやや高かった。交通事故の体験では、東京都がやや高く、埼玉県、広島県の市街地でやや低かった。危険な体験をしたことのない母親は広島県の市街地、漁村部で若干多かった。

(2) 母親の事故防止対策

小さな子供に対して何らかの誤飲防止対策を実施した母親は1791名中1610名(89.9%)，溺れに対する防止対策を実施した母親は678名(37.9%)，交通事故防止対策を実施した母親は1486名(83.0%)，転落防止策を実施した母親は827名(46.2%)。その他、何らかの危険防止対策を実施した母親は189名(10.6%)であった。また、特に危険防止のための対策を実施しなかった母親は53名(3.0%)にすぎなかった。

地域差についてみると、埼玉県が東京都、広島県に比べ実施率が低かった。 $(p<0.05)$ 。その他、東京都と広島県、その市街地、山村部、漁村部による差はみられなかった。

考察：不慮の事故の死亡率は総死亡数の減少とほぼ平衡して近年減少がみられている。しかし、6～7才の年齢階層においては、死亡者の40～50%が不慮の事故によって占められ、その割合にも大きな変化がみられない。これらの不慮の事故の多くは、ちょっとした保護者の注意などで防止可能と思われるものが多い。このような予防可能な事故による生命の損失を防ぎ、事故損傷による後遺症を減らすことは、小児保健上大きな課題の一つと思われる。しかし、我国の事故の実態に関しては、死亡統計がみられるのみで、事故頻度、種類などについての報告は少なく明らかでない。

館¹⁾は死亡事故1に対し、後遺症のみられる事故は150、家庭内で処置を必要とした事故は1500倍みられると予測し、Gallagher²⁾もほぼ同様の報告をしている。そこで、最近の我国における小児の事故の種類や頻度を明らかにし、また、母親がそれらの事故に対して防止策をどの程度実施しているかについて調べることは事故防止を考える際の資料として重要と考えられたので実態調査を行った。

調査結果より子供が体験した事故として多いものは、外傷43%、誤飲20%、交通事故にあたり、まきこまれそうになったもの10.7%、溺れそうになったもの5.6%であった。これらは一歩誤ると後遺症や生命にかかわるような事故に発展する危険性があり、非常に多くの子供が危険な体験をしていることが明らかになった。

事故体験に関しては明らかな地域差は認められなかったが、東京で交通事故にあいそうになった体験が他の地域に比べやや高かった。これは、東京での交通事情の悪化を反映しているものと思われる。

事故防止対策については、誤飲対策が約90%、交通事故対策は80%と大多数の母親が実施していた。また転落防止については半数の母親が柵などを使うなどしていた。これらに比べ溺水の防止は38%とやや実施率が低かった。

事故発生と防止対策の関係についてみると、誤飲防止対策、交通事故対策、溺水防止対策を実施していると答えた母親の家庭では、その子供の事故発生頻度がかえって多くなっており、防止策を実施しているにもかかわらず、効果があがっていないことが明らかになった。このことより、防止

策の方法及び開始する時期などについて更に検討が必要と思われる。

また、1～4才における英国の事故死が我国と比べ少ないこと³⁾より、英国で実施されている事故防止のためのプログラムなどについて、今後我国においても参考にすべきと考える。

事故防止プログラムは総合的に実施することが必要で、子供の発達段階等を考慮した上で、周囲の危険な状況を取りのぞくこと、安全のための教育や訓練を実施し、発生をくい止めること、また、不幸にして発生してしまった事故に対して被害を最小限にするための現場での初期治療、搬送方法、病院での治療などについても検討する必要があると思われる。

文 献

- 1) 館 正知：乳幼児の死亡に至らぬ不慮の事故
その調査方法及び若干の成績、厚生省の指標、
7: 3-8, 1960.

- 2) Gallagher, S.S., et al.: The incidence of injuries among 87,000 Massachusetts children and adolescents: Results of the 1980-81 Statewide Childhood Injury Prevention Program surveillance system. Am. J. Public Health, 74: 1340-1347, 1984.

- 3) 田中哲郎：小児期における不慮の事故死についての国際比較、日本医事新報、No. 3359: 30-34, 1988.

事故防止対策

	全地域総計 N = 1791
誤飲防止対策実施	1610 (89.9%)
溺水防止対策実施	678 (37.9%)
交通事故防止対策実施	1486 (83.0%)
転落防止対策実施	827 (46.2%)
その他の危険防止対策実施	189 (10.6%)
特に実施していない	53 (3.0%)

事故体験

事故体験	地域	全地域総計 N = 1791
タバコ等の誤飲体験		349 (19.5%)
溺れかかった体験		100 (5.6%)
切り傷、打撲で 受診の体験		765 (42.7%)
交通事故にあいそう になった体験		192 (10.7%)
その他 危険な体験有り		132 (7.4%)
危険な体験無し		653 (34.5%)

事故体験と事故防止対策

		事故体験の有無								
		誤飲体験		溺れの体験		外傷の体験		交通事故体験		
		有	無	有	無	有	無	有	無	
事故防止策の実施の有無	誤飲防止実施	有	324	1286	91	1519	702	908	171	1439
		無	25	156	9	172	63	118	21	160
	溺水防止実施	有	136	542	39	639	272	406	75	603
		無	213	900	61	1052	493	620	117	996
	交通事故防止実施	有	287	1199	86	1400	681	804	174	1308
		無	62	243	14	291	84	221	14	291
	転落防止実施	有	159	668	54	773	355	472	86	741
		無	190	774	46	918	410	554	106	858
	その他の事故防止実施	有	31	158	10	179	88	101	20	169
		無	318	1284	90	1512	677	925	172	1430



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 今回の調査により, 子供の事故体験を持つ母親は全体の 65.5%で, 多い体験としては, 医師を受診した外傷(42.7%), タバコ等の誤飲(19.5%)であった。母親の実施した事故防止対策としては, 誤飲対策 89.9%, 交通事故対策 83.0%, 転落対策 46.2%などで比較的高い水準であった。しかし, 事故対策を実施している家族の事故の発生率は実施していない家庭に比べ低くなく, 現在実施している予防策は余り効果的でないと思われた。事故の発生率, 予防策の実施率に関してはほとんど地域差がみられなかった。